

そなえ・まいさん 湯川さん 米山さん 永沼さん 武村さん

# 阪神大震災 避難所の品 触れて知る

@ぼうさいこくたい

10月下旬、神戸市で国内最大級の防災イベント「ぼうさいこくたい」が開かれました。発生から27年がたった阪神・淡路大震災の被災地はいま、どうなっているのかな。どんな教訓を受け継ぎたいんだろう。防災班の特別記者、そなえ・まいが取材しました！



**まい** 洗面器や電気コト、パスタ、ト、バター。又わそのなかかんをるた。この体験型のイベントでは、避難所になった神戸市の應取中学校で使われた物が用意され、若い人が触って当時に思いをはせていきました。

**まい** 洗面器や電気コト、パスタ、ト、バター。又わそのなかかんをるた。この体験型のイベントでは、避難所になった神戸市の應取中学校で使われた物が用意され、若い人が触って当時に思いをはせていきました。



**避難所で使われていた物に触って感じたこと**

- 大会の横断幕** 8月まで(避難生活)長いなあ。人とのつながりを大切にしたいんだ。
- 洗面器** 赤ちゃんのお風呂 どうしたのかな。
- パスタ** 使い込まれている。大事に使ったんだろ。
- な頭痛薬** ストレスが多い生活で必要があったのでは。
- 避難所** 避難所は1月から8月に開設され、盆踊りは翌年8月に「同窓会」として開いた。
- 自衛隊の風呂** 自衛隊の風呂が1月末に設置されて赤ちゃんが入る時間を最初に設けた。
- 学校にあったもの** 学校にあったものを使った。
- 他県から来た医療チームが常駐してくれた** 他県から来た医療チームが常駐してくれた。

## 教訓 伝えることが大切

**まい** 阪神大震災から長い時間たつた、教訓をいかに残してほしい。でも、100年後の共感(こころ)というポイントで、神戸市で語り部活動をしている高橋一平の藤川友太さん(み)から、ご公認が打明されました。

**湯** 被災者から聞き取った話を語り部活動に活かす。自分経験してないことを伝えること、経験も大事です。

**まい** これに答えたのは、北淡震災記念公園(兵庫県淡路市)の総支配人、山内正樹さん(み)です。

**米** 震災を体験して、なにも語り部になる必要はない。ただ、語り部が被災者の話を聞き取って、それを伝えることが大事です。

**永** 重要と語る一方、こんな課題も紹介しました。伝承施設は増えるが、団体や人は減っている。

**まい** 二つの大きな震災の経験者は確実に減っています。百年後に残す教訓をどう受け継いでいくのか、百年後には前の一九三三年起きた関東大震災の研究を、三十年続いている名古屋大特任教授の武村雅之さんはこう話しました。

**武** 関東大震災は資料が残っていて、何が起きたかが伝わっています。時代を超えて伝えるには、震災の体験談と科学的な研究の成果が結びついて語られなければならない、と願っています。

## あれから27年—— 孤立する被災者も

「神戸リアル」というTwitter(ペン)には、災害復興住宅の支援者らが被災者のいまを報告、見守り活動を続ける金沢幸子さんは「家族を失い、高齢で仕事から離れ、隣に住人も知らず、孤立を深めている人がいる。行政を現場でつなぐインターネットが必要」と訴えています。

住宅管理会社の長井野子さんは「コロナ禍で戸別訪問が難しい。ポストを覗いて、自身も最近、被災当時を思い出して、八二ツのような症状が出たそうです。私は被災者の下敷きになんたけほしい人がいる。苦しいと言っているじゃない、いつのまにかの奥底に押し込んで、一と打明けました。災害が再建されきれいになっても、災害は人々の心に長く影響を留めます。を知ってほしいです」。

### そなえ・まいを紹介

ぼうさいこくたい(防災推進国民大会)は、内閣府などの実行委員会が主催で今年で七回目。関西では初の開催でした。

備前のシンボルとして整備されたエリア「H&T神戸」を会場に、災害時のトイレを最新の技術、防災団体の取り組みを紹介。会場には「プース」写真、地震や大雨のときに自分の身を守るポイントを書いたチラシを配り、中日新聞紙面を折り出したりして活動を行いました。

### 次回来月6日予定

そなえ・まいさんは名古屋市のNPO法人「防災自衛隊」の副理事長が企画名古屋女子学院専門学校制作した防災アイドルキャラクター。取材体験記は随時掲載します。まいさんが「ぼうさいこくたい」を取材した動画は、定期購読者向けにインターネット上で無料公開しています。登録は無料。QRコードで見るとなれます。次回の予定は十一月五日の予定です。文・横井武昭

## 被災後の被害状況 詳細に



吹き出しの様子を描いた安永洪水図一名古屋市博物館提供

### ▼20▲ 安永洪水 (名古屋市区など)

愛知県を中心に大きな被害が出た。二〇〇〇年九月の東海豪雨、名古屋市区のあじ野公園には「東海豪雨被害図」が立つ。当時碑の真裏にある新川の堤防が決壊した。この地域は何度も水害に襲われています。名古屋大研究員の末松憲之さんが解説する。その一つが一九七九年の安永洪水だ。豪雨で市内の堤防が決壊し、同県瀬西市西枇杷島町や名古屋西区などに水に浸った。尾張藩士の絵師、高力猿蓑庵は発生直後に現地に入り、被災状況を記録。安永洪水図に残した。水没の様子や死傷者数を伝える被災者、米や服を乾かす人々を丁寧に描いた。名古屋博物館(瑞穂区)はこの図を解説付きで「猿蓑庵の本 安永洪水図」として複製出版した。学芸員の鈴木雅之さんは「あの軒先あたりまで浸水した状況がよく分かる。被災直後に自分の足で歩いて詳細に記録した記録は貴重」と説明する。

安永洪水は、庄内川の水を流すための新川が五年後に掘削されて水害は減った。しかし、東海豪雨ではその新川が破壊された。田んぼだったところが市街地になったことが、被害を招いた一因といえる。

末松さんは「土地利用の仕方によって被害は変わって来ている。どうして被害がある」と教訓を語った。(横井武昭)

**名古屋博物館**

名鉄大山線 名古市駅より徒歩5分。東海豪雨水害之災は名鉄大山線中庄内駅から向かいのアクセス

動画はこちら